

図書館に望む

B・R生

私が真の意味で図書館を利用し始めたのは、学部学生になったばかりの頃で、研究の時間の発表のために資料を求めて附属図書館と学部図書館を利用した時であった。古ぼけた目録ケースの前に立ったその時の私の状態を形容すると、生まれて初めて泳ぎを覚えようとする人のようで、しかもその上、案内者は人間ならざる一片の案内掲示であり、(一種の不安につつまれていた。) 囲りの黒ずんだ壁、色あせた案内掲示、古ぼけた目録ケースとそれ等を包む陰気な雰囲気私に私の不安が奇妙に溶け合っていた。

それから一年余り過ぎて、今では相当に図書館の利用に慣れて、教室での講義から生まれる疑問、問題意識の解決の他に、講義に関係しない自分の興味、関心を満足させることにも利用している。しかし、それでも書物の利用の仕方をも含めての私の図書館の利用の仕方が十分なものとは思ってはいない。さらによい能率的な書物、図書館の利用の仕方があると思うと同時に、より良い私の関係ある主題へのアプローチの仕方があると思っている。例えば、1750年代のザルツブルグはどのような状態であったかという問に答える最低限の知識のある人は、5冊の書物を、また他の人は2冊の書物を閲覧して、得たとすれば、後者の人は前者の人よりも図書館の利用の仕方においてまさっているといえる。これは能力の差であってはならず、技術の差である。この後者の人の技術が図書館を利用する人すべてに与えられるべきことは当然要請される。そしてこの技術にすぐれた人は、熟練した研究者か、あるいは図書館に常に存在して図書館の蔵書の利用の仕方に通じている図書館員である。だから、上に述べた要請を満たす最も適当な人として図書館員が先

ず考えられ、彼がその都度、利用者の相談を受けて、この技術を与えることになる。このような任務を持つ図書館員がアメリカの大学図書館に配置されていることを、最近米国留学から帰った友人から直接聞いたのだが、京大の附属図書館には、それに当たるような係りが配置されていない。

図書館が利用されるために存在しているとすれば、利用者と図書館が先ず最初に関係しあう物質的援助としての分類目録、閲覧室の机・椅子等の他に、人的援助としてのインストラクター的役割をもつ相談係のようなものが必要であると思う。そうすれば、私の初めに述べたような図書館利用における経験は不要となり、図書館員と利用の間隙が埋まるのではないか。今の状態では図書館側が試行錯誤的利用をする利用者の不安・当惑をそのまま無関心に冷視しているように思える。

もう一つ附属図書館について不審に思われる点は、夜間8時までの開架閲覧室の開館は、友人の語る夜を徹して開館する米国の一例には比すべくもないが、その開架書架を伴った閲覧室に各種の参考資料が配置されていないことである。この点は一面、図書館側は、この閲覧室について、その空間のみの使用を促進し、図書館の書物の利用を妨げていると解釈せざるをえない面も持っている。なるほど直接手にすることの出来る開架制の書架の書物は、この間に利用することは可能である。しかしこの書架にある書物の多くは概論書と定期刊行物であり、参考資料的性格のものは少なく、またその性格も薄い。さらにこの間に利用する学生の多くは専門書を勉強していると考えられるとすれば、ここでとられている処置は、大いに疑問である。ちょっとした事柄、言葉の意味を調べる必要が生じたばあい、直接にそれに答えてくれる情報が存在しないことは、学習の意欲を抑止し、学習をあいまいにさせる。従って、図書館側とっているこの管理方式は、決して学習意

欲を促進さす方策ではない。

大学での勉学は、自らの学習、研究であって、ただ単に教授から知識を授けられることによって行なわれるのみでないといわれるとき、大学図書館の大学社会に対しての役割機能のもつ意義は大きい。四回生となつて、卒業論文の構想を練っている毎日であるが、大学図書館の存在意義を意識的に自覚することは学生生活において無意味なことではない。

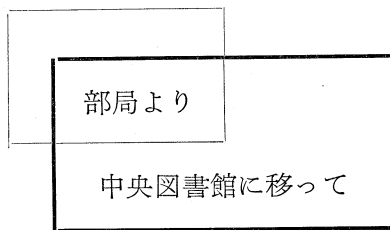
(文学部 4 回生)

附属図書館には、レファレンス・サービスを本来の使命とする参考掛があり、参考図書室のカウンターで、利用者の質問や相談に応じています。しかし現在の段階では掛員が2名で、雑誌や資料の整理、交換などの業務に追われ、積極的な活動ができかねる事情にあります。利用者の要求に応じて、でき得る限りのサービスをしておりますので、ご利用下さい。

参考資料は、主として参考図書室に配架されています。しかし語学の辞書、法経の参考書、年鑑、白書等は、開架図書室のカウンター横にも置いています。なお、参考図書室は人員の関係午後5時に閉室しますが、それまでに閲覧手続きをすれば、開架室の図書と同様8時まで利用できます。

図書館の利用方法やその他疑問があれば、遠慮なく掛員に尋ねて下さい。参考図書室の入口に投書箱も設けていますから、希望や意見をお聞かせ下さい。

——編集子より——



L.M

春の嵐にも似た人事異動の波にのせられて、去る4月部局図書室から図書館に移って来たのであるが、ここも圧倒的に女子職

員の多い職場である。

まず毎朝出勤後直ちに一斉に拭き掃除が始まるが、女子職員にとって、お茶くみや、お掃除等、問題になって敬遠されがちなこの時節に、この人たちは広い部屋の書架、カード箱、机等を、短時間に実にむつまじく、いそいそと片づけられるが、これはとてもさわやかな光景である。これだけ統一のとれた職場であるから、膨大な図書の整理業務においても、人手不足というものの、要領よく、非常に敏速に、且つ悠々とはいかどらせている。勿論これは優秀なスタッフがそろっているためでもあるわけだが、ただ一つ残念なことは、ここは研究室から疎遠になっていて、研究者に接する機会も少なく、学界の情報も入らず、その結果ここで働く人たちは大学図書館の利用者である教官や学生にサービスする重大な使命をともしれば、忘れてゆくようなことになるのではなからうかと思う。

現在のところこの整理業務は部局の図書の受入登録と目録作成に関するだけで一応終っているが、かつて部局図書室で私が経験したように、研究者の要望に応じて研究資料を収集し、特に入手不可能な西洋の稀覯書の場合は、ヨーロッパの図書館の蔵書目録を調べてマイクロフィルムコピーで取りよせ、さらにその目録の作成や分類はいうまでもなく、教官の申出によって主題目録をも作って研究室に備える等、研究者へ奉仕できる自分の立場に大学図書館職員としてのささやかなよろこびを持っていたのだが、ここではそれほど深く細かいサービスをする必要もなく、またそのような時間的余裕もないようである。その点私自身にとっては、いささか淋しく物足りない気がする。ではこの中央図書館において、どういふことに仕事の上のよろこびをみつけてゆくか、それは今後私の探究せねばならぬ課題である。

(附属図書館員)